

| | | |
|------------|---------|------|
| 体育 2年A組 | とびばこあそび | 石本倫章 |
|------------|---------|------|

1 単元について

(1) 単元設定の理由

「とびばこあそび」は基本の運動領域の「器械・器具を使つての運動遊び」である。学習指導要領では「跳び箱を使って支持でまたぎ乗り・またぎ下りや跳び上がり・跳び下りなどをする。」となっている。この内容は、跳び箱運動への移行期間として、腕支持をしっかりさせるねらいがあると考えられる。体が比較的軽い低学年の時期にその経験をしっかりさせることで、体力や体形で得意・不得意が大きく左右される跳び箱運動の個人差を埋めようと系統的に考えられたからであろう。また、いろんな跳び越し方に分化する前に、跳び越し方をあまり意識させず、体を腕で支える経験をたくさんさせておきたいというねらいもあるのであろう。

本単元では、体を腕で支える活動をたっぷり経験させるとともに、逆さになる感覚や高い跳び箱から跳び下りる感覚、横跳び越しや開脚跳びなどの跳び越し方もめあて化した活動にしたかった。しかし、これだけの内容を同時に個人のめあて学習だけでおこなわせるには多少無理があると考えたので、以下の2つを本単元の主張点として単元を計画した。

- ◇ 体を腕で支える活動や、高い跳び箱から跳び下りる感覚や逆さになる感覚など全員に経験させるために、準備運動として計画的におこなうこと。
- ◇ めあて1・めあて2の活動の違いをはっきりさせるための場の工夫。

次に、本単元の「意味」のひろがりについて述べておく。それは、単元計画の段階では次のようにとらえていた。それが、本実践の子どもたちの学習の実際との比較を考察することにした。

- ◇ とびばこあそびの「意味」
 - ・ お気に入りの場への挑戦
 - ・ 高さの『克服』
 - ・ 物的障害を跳び越えたときの爽快感
 - ・ 跳び越し方を上手にする『達成』
 - ◇ 「意味」をひろげるとは
 - ・ 学習目的の“多様化”や“変化”
 - ・ 指導者の予想をこえた楽しみ方
- ※ 詳細は本年度研究会要項に掲載

(2) 単元目標

- ◎ 今もっている力でいろいろな場で活動するとともに、できる跳び方で、低い跳び箱や向きの違う跳び箱を跳び越したり、高い跳び箱を跳び越したり、できそうな跳び越し方に挑戦したりすることで、跳び箱から下りたり、跳び越したりする気持ち良さを味わうことができる。
 - ◇ いろいろな場でしっかりあそべたり、高い跳び箱やできそうな技を積極的におこなったりする。(興味・関心・意欲)
 - ◇ 場の工夫をしたり、難易度がわかったりすることで自分のめあてをしっかりとめるとともに、安全面のルールやマナーがわかることができる。(思考・判断)
 - ◇ 腕で体を支えるながら、跳び箱にのったり跳び越えたりすることができるようになる。(技能)

(3) 単元計画

① 単元の時間計画 (全7時間)

| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | ⑥ | 7 |
|------------|-------|---|---|---|---|------------|
| はじめ 20分 | めあて 1 | | | | | |
| | めあて 2 | | | | | |
| | | | | | | まとめ 10分 |

② 単元のねらい

めあて 1

- ◎ できる跳び方で、低い跳び箱や向きの違う跳び箱を跳び越して楽しむ。
 - ◇ いろいろな場で積極的にあそべることができる。
 - ◇ 簡単な場の工夫をしたり、安全面のルールやマナーがわかったりする。
自分のできる跳び越し方がわかる。
 - ◇ 腕で体を支えたり、手のかき、踏み切りと着手のタイミングがよくなったりすることができる。

- ◎ 高い跳び箱を跳び越すことに挑戦したり、簡単・工夫させた場でできそうな跳び越し方に挑戦したりして楽しむ。
- ◇ 高い跳び箱や新しい跳び越し方に積極的に挑戦しようとする。
- ◇ 安全に気をつけることができる。
- ◇ 第一空間の大きさや手の突き放しなどができるようになる。

2 単元の考察

① まなざしの共鳴から「意味と内容」がひろがっている姿

この実践での「意味と内容」のひろがりとは、前述の通り、“子どもたちの学習をする目的の「多様化」と「変化」”であると考えた。それでは、本実践で最も顕著に「意味と内容」のひろがりがあった事例を具体的な子どもの姿で述べることにする。

10/27（木）のことである。彼女（本単元の着目児♡）のめあては「開脚跳びのたての3段」であった。授業当初の様子は、おしりが跳び箱の中央にやっと来る程度であった。しかし、わたしが他の場に行って指導していると、女の子の数人がやってきて、「先生、♡ちゃんもうすぐ跳べそうやから見に来て。」と言いにきた。言ってみるとおしりが跳び箱の前の角に当たっている。「本当に跳べそうやね。がんばろう。」とはげましていると、本当に跳び越えられたのである。そのとき、同じ場で学習していた子たちから「やった。跳べた。」と歓声があがったのである。歓声をあげた子どもたちは、「もうすぐ跳べそうだ。」と言いに来てくれた子たちである。それが、彼女にまつわる『まなざしの共鳴』なのだと感じた。どうしてかということ、♡は運動技能が高くない。それは、本学級の児童なら誰も知っている。しかし、学習にすごく意欲的で、準備や後片づけも最もがんばれる子だということも知っている。だから、同じ場で活動し、歓声をあげた子どもたちは、彼女の跳びたいという気持ちに共鳴し、励ましあいがうまれ、歓声が上がったと思った。ただ単に、跳べそうにない子が、懸命に活動している姿に触発されただけではなく、準備や片づけもまじめにする学習の姿に響きあったのではないだろうか。それ以後、♡は休憩時間に苦手な鉄棒であそびだした。それは、他の子の影響と言ってよい。より良い人間関係のおかげであそびの幅がひろがった。それは、♡の「意味と内容」がひろがったと言えるのである。

② まなざしの共有がまちがい

その子（本単元の着目児◇）は教室の授業では普段から学習意欲があり、積極的である。体育の学習も意欲的であると思っていた。しかし、本単元では意欲が低く、できる技も低調であると感じた。わたしが近くへ行って補助をしようとする、どこかへ行ってしまうことも度々あった。

ある日、本読みカードに、「1年生のころに鉄棒であそんでいて、顔から落ちたことがあり、それ以来鉄棒には恐怖心をもっている。」という内容のお手紙を母親が書いてくれていた。それを読んで、本単元へのこの子の取り組み方に合点がいった。彼女はすごく怖かったのである。それでもわたしは、子どもはみんな跳び箱を跳び越したいという願いをもっていて、彼女も同じだろうと考えていた。しかも、バレーを習っているので、柔軟性があり、筋力も弱くない。背もそれほど低くないので、恐怖心がなくなればまだまだできてくるはずであると考えていた。また、彼女の恐怖心を無くすことはできないかもしれないが、彼女のまわりの子のはげましがあればちょっとはかわってくるのではと期待していたのである。

ところが、他の子のはげましがあっても、わたしがいろいろな指導をしても、なかなか跳び越せなかった。それより、単元が進むにしたがって、もっと跳べなくなってしまった。それは、子どもはみんな跳び箱を跳び越したいという願いをもっていると考えていたので、多少強引な励まし方や補助をしたからだと思う。◇は、跳び越したいという願いより、怖さの方が勝っていたのである。だから、その子のまなざしを共有できずに指導したので、単元当初より学習が後退したという印象をもってしまった。そのことは、その子のみとりの誤りであった。

3 成果と課題

本単元は、基本の運動の中の器械運動領域であり、個人学習が主である。といっても、集団での人間関係がその子の学習に与える影響がすごく大きいことがわかった。それが、まず、大きな成果である。本稿2-①に書いたように、まなざしの共鳴がその子の「意味」をひろげていく可能性をもっている。それは、その子の意欲や技能だけでは言い表せないことである。また、学習カードや場の設定により、子どもたちの学習へのモチベーションをあげていくことで、より積極的に、有機的な関わりがうまれてくることがわかった。それも、本単元を実践した成果であると言える。

最後に、本単元をおこなった課題である。それは、まなざしの共鳴がその子の学習のあり方に大きく影響する運動領域、具体的には「ボール領域」や「ダンス」、「陸上領域」で、お互いの響きあいや励ましあい、助け合いによって学習が進められるような計画ができないものかと考えている。しかし、集団の学習を主とした運動の場合、否応無しに関わりが生まれる。それが、切磋琢磨していく関係かどうか、その子に寄り添いながら学習が進められるかどうかということは難しいと言える。しかし、だから、意図的・計画的にお互いの響きあう姿がだせれば、子どもたちにとって有意義な学習になっていくだろう。そういう単元計画ができないものか試してみるのも必要である。